
平凡な私と可愛い彼、そして時々ファンタジー？

成露 草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡な私と可愛い彼、そして時々ファンタジー？

【Nコード】

N5417Y

【作者名】

成露 草

【あらすじ】

私、名取紫信は17歳の平凡な少女です。見た目も平凡、中身も平凡。見た目20代の母さんとか、同い年の叔母さんとか、周りには非平凡がゴロゴロ転がっていますが、私は平凡です。

「えー、10歳の彼氏がいて平凡はないわよう」

「大丈夫だよ、シノちゃん。恋に年齢は関係ないよ？ ぶふっ」

誰が何と言おうと、私は平凡な少女です！！ 母さんは黙ってて

！！ 叔母さん！ 嘔き出したの聞こえたからね！？ それにあの

子供が彼氏だなんて私は認めてないから！！

「え・・・、紫信さん、ぼ、僕を弄んだんですか!？」
お前は事実を捏造するなあー!!」

そんな感じの紫信の彼氏育成小説です。テレビでも見ながら片手間に読んでください。

だから彼氏じゃない!!　　って言うか、育成ってなんだー!!

プロローグ（前書き）

処女作ですので生温かい目でよろしくお願いします（＊＾－＾＊）

ブローグ

黒髪黒目、不細工ではないと思うけれど、美人でもない顔立ち。

今時の17歳の高校生からすると化粧つけのない私は地味な部類に入るが、気にしてはいない。身長は162センチで体重は多分平均値。

学校の成績は、3と4で埋まっている平均的なもの。遅刻も無断欠席もしないので一応優等生といえるかもしれない。人間関係は広く、浅い。クラスの全員と気軽に会話はできるが、休日に遊びに行くことはない。そんな感じ。それが嫌だとは思っていない。むしろ満足している。

私、名取紫信は簡単に説明するとそんな平凡な少女だ。

だがそんな私の愛すべき平凡な日常は、ある出来事で崩れ去ってしまった。

それは、私と同年の叔母さんが1か月前に持ちかけてきたアルバイトを引き受けてしまったことから始まっていたのだろう。

私の通っている学校はかなりのマンモス校である。

学校の名前は『私立華宮学園』という。この学校は、小等部から大学院までがエスカレーター制の進学校だ。勉学に励めるようにと、中等部からは全寮制になっている。校舎も中等部からは、高層ビルの並ぶ都心から山ばかりの田舎へと移る。

小等部までは、公立の学校と同じ（小等部に途中編入してきた友人に聞いた）だが、中等部からは学科毎に分かれて勉強する。

人数が多い学科は、普通科、体育科、国際科、家裁科、音楽科、美術科、商業科、帝王学科などだ。他にも学科はあるし、さらにこ

の下に専攻があるが全部あげるとかなりの数になるのでやめておく。因みに私は普通科文学専攻、叔母さんは武芸科護衛学専攻だ。

普通科は、一番多く生徒がいる学科である。特に高等部からは、学科変更をして普通科に移る生徒がかなりいるので全校の3割を占めている。

それに対して、叔母さんの武芸科はかなりの少人数で1クラスしかない。その名の通り武術が専門の学科なのだが、同じようなジャンルに思われがちな体育科とはかなりの差がある。それは、オールマイティーなところだ。運動能力だけではなく、学力も凄いのである。武芸科が、この学校の偏差値を上げていると言っても間違いはない。他にも色々あるらしいが私は詳しくは知らない。

こんな学校なので当然ながら生徒数は多い。学校の校舎は6階建てで、26棟ある。運動場も、内外合わせて10以上はありそうだ。保健室、図書館、食堂などは各棟に3つずつある数の多さだ。学生寮は年齢ではなく、学部ごとに分かれているのだが、1つの学部につき平均で5つある。その寮も5階建ての普通のマンションのようなものだ。寮にも、それぞれ食堂、コンビニ、医務室が設置されている。

これだけの施設があると仕事も当然ながら数多くある。これらの仕事を全て外から人を雇うとかなりの金額になってしまう。何よりも費用がかかるのは雇った人達の住む場所の確保だ。何しろ田舎にあるので、周りにはこの学校以外の建物はほぼない。農家がちらほらあるだけだ。

そこで、学校では学生をアルバイトとして雇っているのである。これは『華アル』と言われている。

叔母さんが持ってきたアルバイトも、『華アル』のものだ。『華』は、私たちの通っている学校の名前から、『アル』はアルバイトだ。『華アル』には、大きく分けて2つの種類がある。学校雇いのものと、個人雇いのものだ。

学校の施設の維持を手伝うのが、学校雇いのアルバイトだ。

もちろん、主要な部分は大人がやるが、下っ端の仕事は生徒にやらせるのだ。

たとえば、食堂の場合。メニューを考えるのは家教科栄養管理専攻の生徒、厨房で働くのは家教科料理専攻の生徒、ウェイターをするのは普通科の生徒、という感じだ。

このことを知った時私は、ウェイターは兎も角、他の仕事は大人が見ていたとしても、生徒で大丈夫なのかと思ったが、それは杞憂に終わった。

それらの仕事は高等部以上の、しかも成績上位者しか出来ない高給なものであった。事実、食事はその辺にあるチェーン店よりも遥かに美味しい。

将来、高級飲食店のシェフを目指している生徒達が作っているのだから当然と言えば当然だが。

で、先にも言ったが、私は平凡な少女だ。こんな高級な仕事ができるような学科ではなく、普通科の一生徒だ。ここで問題が発生する。私の様な一生徒がこの学校には3割もいるのだ。人数はいるが、出来る仕事はかなり限られている。寮の掃除やコンビニのアルバイトもあるがはつきり言って供給が足りない。

そこで出てくるのが、個人雇いのアルバイトである。

これは教師や生徒が学校を通して、生徒を雇うものだ。

学校雇いの場合は、働く場所は学校と寮に限られるが、個人雇いは場所に制限がない。外に働きに出ることも多々ある。

教師や生徒を通して、外部の人間が生徒を雇うこともあるぐらいだ。その場合、大抵は雇い主の親族や友人だが。

事によつては、これアルバイトの域を超えてない？ と言いたくなるものもある。そういう仕事は給料もかなり良いが、特殊技能が必要だったりするので人気があるかと言うとそういうわけでもない。出来ない生徒がほとんどなので、それ以前の問題なのだ。

私が遣るアルバイトは、個人雇いが殆どなのだが、今までやってきたアルバイトは良くて時給800円だった。しかも1日で終わっ

てしまうものがほとんどである。はつきり言ってあまり稼ぎはない。そんな私に叔母さんが持ちかけてきたアルバイトは時給1000円。

内容も大して難しいものではない。子供の遊び相手だ。

こんな美味しいアルバイトがあれば、乗らない学生はいないはずである。

決して私の考えが足りなかったわけではない！

プライドで腹は膨れません

授業が終わり、特に部活にも入っていない私は帰りの支度をしていた。

明日からはゴールデンウィークということで、教室の空気はどこか浮足立っている。友人たちも、明日は朝からバスに乗り、町に出るようだ。

いつもと変わらない、いや、いつもより少し明るい雰囲気漂う教室に異質な訪問者が来たのはそんな時だった。

「シノちゃん、ゴールデンウィーク、暇？」

その訪問者はふんわりと金木犀の香りを漂わせながら私に話しかけて来た。まだ、ホームルームが終わった直後だったので、教室にはほとんど全員のクラスメートがいる。彼らは、反応は様々だが皆好奇の視線を向けていた。

「シノちゃん？」

いきなり背後から話しかけられた私は、驚きから反応が返せず、不審に思ったらしいその人が私を後ろから覗き込んだ。私はひと息を吐くとゆっくりと振り返り話しかけた。

「叔母さん、頼むから、気配を消して背後に立つのはやめて」

「普通に話しかけたただけだったんだけどね。背後からって言うのは次から気をつけるよ」

叔母さんはそう言っただけで優しく笑った。

クラスメートの息を飲む音が聞こえた。叔母さんは美人というわけではないがどこか人を引き付ける雰囲気を持つ人なのだ。

私と同年の叔母さんの名前は、緋乃籠目ヒノカグメと言う。身長は170センチもあるが、バランスが良い体型をしているのであまり大きくは感じられない。母親がアルビノだそうで、赤い瞳と真っ白い髪と肌をしている。少し癖のある髪を顎あたりで切りそろえている髪型がとても似合っている。体のラインはどう見ても女性なのに、中性

的な雰囲気のある不思議な人だ。

叔母さんは、教室の視線をまったく気にせず話を続けようとしたが、私は気になる。

だから場所を教室から別の場所に移したいと視線で叔母さんに訴えた。

人の気持ちに聡い叔母さんはそれに直ぐに気がついた。

「お邪魔してごめんなさいね」

微笑を浮かべ、一言そう言い、叔母さんは教室から出た。

その後に残きながら、最後の一言に叔母さんの性格が出ているなと思った。

「・・・学校にキングサイズのベットはいらないと思うんだけど」
私は思わず呟いた。

叔母さんに連れてこられたのは、帝王学科の個人部屋だった。

帝王学科は、お金持ちの生徒達の学科だ。財閥の御子息から、ヤのつく職業の跡取りまで幅広い。学校への寄付金が多いことから、帝王学科のある棟のつくり違つと人づてに聞いたことはあつたが、目の前にするとその凄さに圧倒された。

精々、全体のつくりが丁寧とかそういうことだろうと、私は思っていたが、考えが甘かった。

でも、それは仕方がないと思う。誰が学校の廊下に赤い絨毯があるなどと想像するだろうか。しかも個人部屋？ 学校にそんなものは必要ないよね？

この学校に通つて10年はたつが、驚きの新事実発覚である。

私が探索するように部屋を見渡していると、叔母さんはベットに足を組みながら腰かけていた。

そんな叔母さんを見て、自分の行動が馬鹿らしくなり、私はベットの脇に置いてある高級感あふれる椅子に腰かけた。

「それで、ゴールデンウィーク、暇？」

「暇だけど、どうしたの？」

なんで帝王学科の個人部屋を叔母さんが使えるのだとか、色々と言いたいことはあったが、あえてそれを飲みこみ質問に答えた。

別に諦めとかそういうことではなく、答えが予想できるので帝王学科にも友人がいるのだろう。

叔母さんは私の答えを聞くと、悪戯を計画している子供のように赤い瞳を輝かせた。

昔は、叔母さんのこの容姿が特別なようで羨ましかったが、今は叔母さんだからこそ似合う色だと思える。まあ、母さんと叔母さんは義母姉妹らしいのでどんなことがあっても私がアルビノに生まれることはなかったのだが。

「ゴールデンウィーク、2泊3日で東京に遊びに行かない？」

叔母さんは、声をはずませながらそう言った。

「叔母さん、私そんなお金ないよ。叔母さんなら知ってるでしょ？」

叔母さんのまさかの発言に私はため息交じりにそう答えた。高給取りな叔母さんと比べたら、私の収入は雀の涙、いや、それ以下だ。そうそう泊まりで遊びに行けるような稼ぎはない。

そんな私を見て叔母さんは更に瞳を輝かせた。

「それがね、お金を稼げて、旅行にも行ける美味しい話があるんだよね」

「え？ なにそれ？ 何かの罠？」

「いやいや、シノちゃんに私が罠仕掛けてなんの得があるの」

美味しい話には裏がある。叔母さんが私を騙すようなことをする人ではないと知っているが、思わず訊ねてしまった。

叔母さんはそんな私をなぜだが微笑ましげに見た。

「えーと、取りあえず、詳しい話を聞いてもいい？」

なんだか恥ずかしくなり、私が話を促すと叔母さんはひとつ頷き、その内容を話し出した。

「元々はね、私に名指しで来た仕事なのよ。それが、東京で2泊3日過ごす間、護衛兼話し相手をして欲しいって言う依頼なの。対象は、雇い主の高等部2年の柳咲梗也とその弟の小等部4年の柳咲彼方^{ナタ}で、この彼方君がシノちゃんを雇う理由になるのよ」

「柳咲って、柳咲財閥だよな。帝王学科って本当にお金持ちばかりなんだね」

日本で1、2を争う大財閥の御子息がこの学校にいるならこの無駄な豪華さも何とか受け入れられそうだな。だが、それとこれとは関係ない。金持ちだろうと何だろうと相手は10歳の子供だ。

「でも、別に対象が2人いても私が必要になる理由はないんじゃない？ 叔母さん子供の扱いは得意でしょう？」

叔母さんには、上にも下にも年の離れた友人がいる。私が知っているだけでも、上は30代、下は小学生だ。

そして、誰に対しても主導権を確保出来る叔母さんだ（先生が相手でもそうである）。

色々な意味で、不得意だと言われても信じられない。

「うん。そうだね、子供の扱いはどちらかと言えば得意だよ。でも、それは関係ないんだよね」

「と言うと？」

「その彼方君はね、酷く内向的な性格なのよ」

内向的、人見知りということだろうか。ならば尚更私の必要性が分からない。しかも子供の扱い方が関係ないって、一体叔母さんは私に何を求めているのだろうか。

私が理解していないことを察したのか、叔母さんは噛み砕いて説明をしてくれた。

「彼方君には、一度会ったんだけど、流石財閥の御子息ってだけあって外ズラは10歳にしては中々のものだったよ。でもね、子供らしさがまったくもって感じられないって言うのも問題ありだよな？」
そこまで言われて、叔母さんが何を私に求めているのかが分かった。

つまり、その彼方君には子供の扱いが得意な大人ではなく、普通の友人が必要と言うことなのだろう。10歳の子供と同等の位置にいる友人が。

かなり私を馬鹿にしている内容だが、確実に叔母さんに悪気はないのだろう。おそらく、この内容が人を馬鹿にしていると分かっているが事実だから問題なし、と考えているのだろう。

確かに、私は叔母さんや武芸科の人達に比べれば子供っぽいかもしれないがこれは普通だ。叔母さんたちが非常に大人びているだけだと思う。

だが、そうだとしても17歳の自分が10歳の子供と同レベルと言われていることは少々腹立たしい。その彼方君が大人びているという可能性もあるがそれはそれでプライドが傷つく。

そんなことを考えて、中々答えの出せない私の耳に叔母さんの声が届いた。

「時給1000円」

その言葉に思考が一瞬止まる。

「交通費、食費、宿泊費はすべて向こう持ち。睡眠時間も時給換算」
「やる」

睡眠時間も入れれば、1日最低でも10000円は確定。それが3日。

毎月、実家からの仕送りと華アルで何とか生活費を稼いでいる私にはその話は魅力的過ぎた。

プライドよりも生活水準の向上である。

ゴールデンウィーク 一日目 パート1

西洋のダブリン城の様なデザインの建物は、クリーム色と深緑色を基調とした、落ち着いた雰囲気のものだ。豪奢と言うよりも凜然としている。庭園には噴水があり、愛らしい天使が水瓶から水を流し続けている。咲き乱れる薄桃色の薔薇は満開だ。建物内の家具などの装飾品は、木製の物が多い。だが、全体に施された細やかな彫刻や所々にアクセントとして付けられているエメラルドと銀によって、一つ一つに芸術作品の様な美しさがある。

朝の6時に寮に車（柳咲家の物）が来て、連れてこられたのがこの城、としか呼べない屋敷だ。

私のゴールデンウィーク中の滞在場所である。

自分のイメージとのギャップに思わず目を瞬く。

叔母さんが言ったことに間違いはない。所在地は東京、滞在日数は2泊3日である。

だが、どうしても一言言いたくなって、一緒の車に乗ってきた叔母さんを見ると、エントランスホール（玄関とはとても言えない）の床の大理石に施された細工を何の興味もなさそうに観察していた……なんだろう、この疎外感。この屋敷の凄さに驚愕しているのは、私だけなのだろうか？

「叔母さん、私、今すぐ帰りたくなってきたよ」

「駄目だよ、シノちゃん。一度引き受けたことは最後まで遣り通すのが大人つてもものだよ？」

「いやいや、私まだ、17歳だから大丈夫。未成年だからね」

そんな雑談を繰り返しているうちに、だんだんと落ち着いてきた。叔母さんもそのつもりだった様で、私が落ち着いたのを感じ取ったのか、背中を軽く叩かれる。

こういう瞬間、何時も叔母さんの凄さを実感する。

そうこうしているうちに、私と叔母さんの荷物がジェントルマン・

イン・ウェイティング（以下ジェントル）によって、車から運び出されていった。

メイドの男性版と言えば、執事だと私は思っていたので、ジェントルという役職名を叔母さんに聞いてとても驚いた。

日本で執事と言っているのは、ランド・スチュワードやバトラーのことらしい。叔母さん曰く、この二つは全く仕事が違うが、ランド・スチュワードが雇えない家は、バトラーにその仕事も兼任させるので同じような扱いになったそうだった。

叔母さんからそんなマメ知識を聞いていると、正面にある巨大な螺旋階段から、初老の男性が足音もなく降りてきた。

どこことなく緊張をはらんだ空気が、彼が表れたと同時にジェントルの間に走る。

顔に深い皺が刻まれた男性は、若い頃は美青年であつたであろう面影が窺えた。

彼は、ハウス・スチュワードの七瀬だと自己紹介すると、この屋敷の主人であり、私達の雇い主である柳咲梗也と彼方のもとへ案内し始めた。

彼らは昨日、授業が終わって直ぐに出発しており、昨日の夜からこの屋敷にいるそうだった。

エントランスホールを抜け、彼らが待っている部屋へと廊下を歩きたしたが、ここでもすれ違うジェントルやメイド（これもまた色々種類があるらしいが面倒くさいのでメイドで統一）は七瀬を見ると、緊張しているのが雰囲気から分かった。

彼が恐ろしいのか、彼の役職が恐ろしいのか、いまいち分からな

い。

右手首につけている水色を基調としたシンプルな腕時計を見ると、まだここに着いてから10分程しか経っていない事に気がついた。

しかし、与えられた様々な情報に（その半分は叔母さんによるものだ）私は多大な疲れを感じていた。

右斜め前を歩いている叔母さんが首だけで少し振り返り、苦笑を

浮かべたのを見て、何もかもお見通しなのがあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5417y/>

平凡な私と可愛い彼、そして時々ファンタジー？

2011年11月23日19時54分発行